

バンコク日本人学校におけるタイ文化理解の授業実践

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）教諭
東京都世田谷区立東深沢小学校主任教諭 鈴木 淳也

キーワード：在外教育施設、バンコク、国際理解教育、小学校の総合的な学習の時間

1. はじめに

在外教育施設に派遣していただき、自分の見識を広げるまたとない機会をいただいた。長期に渡る海外生活は初めてであり、生活への不安と共に、現地の子どもたちに何ができるのだろうかと考え努力する日々であった。様々な取り組みを行ったが、ここでは、国際理解教育での実践を報告させていただく。

2. バンコクでの生活とバンコク日本人学校の教育環境

(1) バンコクでの生活

タイは貧富の差が大きい社会である。その中で、バンコクは、経済的に恵まれている人々が多く住んでいる都市といえる（バンコク内でも貧富の差は大きい）。その中で、タイに住む日本人は、企業から派遣された、もしくは個人で来泰し事業を行う人がおり、経済的に恵まれた地位に属しているといえる。そのため、バンコク内には、日本人を相手にしたお店や日本人が経営しているお店も多く、そして、日本語や英語が通じることも多い。よって、日本人にとって生活しやすい環境にある。

(2) バンコク日本人学校の児童

日本人と多数のタイ人の間にも経済格差があるため、日本人学校に通う子どもたちの置かれた環境にも特徴が出てくる。例えば、学校や学習塾へ行くのもバスや車での移動となったり、お金持ちの日本人は犯罪のターゲットになるため（バンコクの治安はよいが）、子どもたちだけで出かけたりすることは基本的になく、大人と一緒にいるのが現状である。その結果として、子どもたちは、タイで生活しているにも関わらず、タイ人との交流が少なくなり、大人に守られた生活であるため、タイの文化に触れる機会に制限がある。観光地のことや生活上経験したことだけ知るといのが現状であった。

(3) 現地理解教育の推進（総合的な学習を通して）

そこで、日本人学校に住む子ども達がよりタイの文化や社会を理解すること、タイに住んでいないと分からないことを学ぶ機会を作りたいと考え、総合的な学習の時間の内容を全面的に再考することにした。総合のテーマとして「泰日親善大使になろう」とし、タイのことをより深く理解し伝えていける児童の育成を図ることにした。その学習内容として、以下の4つを柱として展開した。

① タイ語教師と連携した授業

バンコク日本人学校では、どの学年でも週1回のタイ語の授業が行われている。その授業は、タイ人の先生が行っている。その授業が中心となるため、総合の時間では、文化の紹介をすることにし

た。「タイの5年生はどんな勉強をしているの？」と子ども達に聞くと、ほとんど何も知らない。そこで、タイの現地校の授業風景などの動画を見せ、そこから出てきた疑問をタイ人教師に聞くことにした。どのクラスも(10クラス)動画を観た後、たくさんの質問があり、楽しい授業となった。



タイ人教師との授業の様子

以下の3つの柱は、社会科と連携して行なった。タイに生活しているが日本人学校の児童は、社会科で日本の農業、魚業、工業を学ぶ。そのため「タイではどうなっているのだろうか」という視点で学習を計画した。

② タイの農業について

タイの米作りに焦点を当てた。この学習では、タイ KUBOTA から講師を招いて授業をしていただいた。日本とは違い二期作であることや、種を直に撒くこと、そして、タピオカの原料であるキャッサバの収穫について教えていただいた。

③ タイの漁業について

タイではエビの養殖が盛んである。そこで、マルハニチログループのキングフィッシャー社の方に講師に来ていただいた。授業では、エビの養殖の様子や日本の回転すしで食べるエビのほとんどがタイから輸入していること、会社には2名の日本人がいるがそれ以外の3000名の社員はタイ人であることなど、養殖から製品化、そして輸出までの流れを知った。

④ タイの工業 (タイトヨタ自動車見学)

タイトヨタ工場見学は、毎年行われている。タイでもジャストインタイムなど日本的経営の良さを活かしていること、また、車をその国の環境に合わせて工夫して製造していることやタイだけではなく他の国へも輸出をしていることなどを教えていただいた。

3. まとめ

このように、在外教育施設に通う児童にも、その国の文化や社会を深く理解できるように教師が授業を計画し工夫しなければいけないことが分かった。タイ人教師やゲストティーチャーの話を、興味をもち集中して聞いていた児童たちの眼差しがとても素敵だった。子ども達には、海外と日本との違いを理解し、そして、将来、その違いから価値を創造できる人材へ成長してほしい。